五代教主作 灰釉茶盌 銘「高照姫」「金龍海五大州茶盌」
六盌のうちの一盌（金龍海周辺土・金龍海周辺松釉）

平成25年(2013)

4月号・Aprilo

題字 出口直日

通巻第529号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL（IP） 050-5510-9502
03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

一りんの草花にさへ天地の
めぐみの露はうるほふものを

出口王仁三郎聖師

「信仰即生活即芸術」の教えに思う

祭務課主事 井畑 太

楽天社で楽天書道誌の編集を担当していたころ、書家であり文筆家であられた綾村坦園先生のご自宅に公務で毎月お伺いしていました。その折りに、綾村先生が「井畑くん、我々がいくら修行しても二代さまのようには絶対になれん。金屏風もお茶碗の箱書きもいっしょやもん。ああは絶対になれん！」とおっしゃられていたことを印象深く記憶しています。どういうことかと申しますと、金屏風に書かれている書も、お茶碗の箱書きもいっしょの心持ちで書かれている、私たちはそのようにはなれない、とおっしゃっているのです。

三代教主さまはご著書の中で、『・・・母は文字を習ったこともなく、上手に書こうという意図もなく、よい書を見る機会もなく、ただ母の心ばえからできあがった文字に外なりません。しかし、そこに大らかな美しさが、一パイになって現われています。この点を北大路魯山人さんや、谷川徹三先生のような方が激賞されています・・・』。また同じご著書の中で開祖さまのことを、『わたしの祖母（開祖）は、茶の湯について、形の上では何のかかわりももたれなかったのですが、祖母は高い茶のこころを身につけていられました。まことに、たぐいまれなる大茶人であったと、わたしはいつも敬っています。祖母は行ないの、ふとした節にも、茶の美しい姿が宿っていました。その生活には、いつも、茶でいう―和敬静寂―の気がただようていました』（「私の手帖」）。

これらのことはすべて、「人柄」あるいは「人となり」「人格」のことをおっしゃっているように思います。いま各地で開催されているお作品展で、訪れた一般の方々から感動の声や絶賛の声が多くよせられていますが、こういう時こそ「脚下照顧」、己の再点検に反省しきりであります。

聖師さまは、『月光いよいよ世に出でての宣伝歌中に〝四方の国より聞こえ来る、誠の神の声を聞け〟とあるは、こちら（大本）から向ふへ行って、向ふより聞こえてくる誠の神の声を聞けということだ』とおっしゃっていますが、奥深いお言葉だと思います。

第119回大本公開講座「出口なお・王仁三郎の世界を語る2013」

大本の神示と世界の将来

―人類への預言と警告―

講師　出口眞人（大道場講師）

開祖の生い立ちと苦労

大本は、明治二十五年の二月三日、艮の金神と名乗る神さまが出口なお開祖に神がかりし、一貫して世の中の〝われよし、強いもの勝ち〟の精神を改めて「立替え立直し」しなければ人類は滅んでしまう。そして神人一致した穏やかな「みろくの世」を建設しなければならないと叫ばれました。

なおは、天保七年旧暦十二月十六日、京都府福知山市の桐村五郎三郎の長女として生まれました。

なおの生まれた時代は「天保の大飢饉」に象徴されるように、異常気象による飢饉が多く起こった時代です。そのため、幼少のころから子守奉公で働きに出なければならないほどの貧しい暮らしぶりでした。

嘉永六年、十七歳の時に母方の叔母にあたる出口ゆりの養女となって出口家に入り、綾部市に移り住みます。そしてその翌々年、十九歳のときに出口政五郎と結婚をします。

政五郎は大変腕の立つ大工で性格も楽天的でしたが、芝居とお酒が好きな浪費家だったため、多額の借金を抱える生活でした。

なおは家計を支えるため、八人の子どもを養いながら、糸引きやまんじゅう売り、紙屑集めなどの仕事をして、苦労をする生活が続きます。

中でも紙屑集めについて、なおの末娘である二代教主出口すみは、このように話しています。

『世におちている神々をおもてに出して三千年余りてのお仕組みどおりになされることになって、そのお仕組みの大切な原型（もとのかた）として神界からのご命令で教祖様に紙屑買いをさせられたのであります』

つまり紙屑を集めることは、世に落ちて散り散りになっていた紙（神）を再び世にお出しする型であるということです。

艮の金神のご帰神と宣言

そして、なおが五十七歳の明治二十五年の二月三日に神懸かりが起こります。なおの口から力強い男の声が発せられました。その声は抑えようとしても、自然と腹の底から込み上げてきました。

『ご開祖の神がかりをみられたことのない人には想像できませんが、ふだんはやさしい、ものしずかな教祖さまが、神がかりの時は腹の底から凛とした、誰しも聞けば身の緊（し）まるような、輝くような力強いお声がほとばしり出たのであります』

と、二代教主は開祖の神がかりの様子をこう述べています。

なおに懸かった神は、『自分は艮の金神である』と言いました。艮といったら鬼門の方角です。鬼門の金神が自分に憑いたということで、なお自身が一番驚きました。

しかし、その声は「三千世界の立替え立直し」を訴える声であり、「人々の改心」を迫るものでした。

自分に憑いた神が、悪神、たたり神ではないかと問答すると、「そうではない。自分は三千年間押し込められていた艮の金神である。正しい真の神だ」と言います。

そして、その神は口で言わすかわりに「筆を持て」と言いました。

なおは「自分は読み書きができない」と答えると、神さまは「心配するな。この方が書くのだから、大丈夫だ」と言い、自動書記的に文字が書かれていったのです。

『三ぜん世界一度に開く梅の花、艮の金神の世に成りたぞよ。梅で開いて松で治める、神国の世になりたぞよ。この世は神が構はな行けぬ世であるぞよ。今日は獣類（けもの）の世、強いもの勝ちの、悪魔ばかりの世であるぞよ。世界は獣の世になりてをるぞよ。邪神にばかされて、尻の毛まで抜かれてをりても、まだ眼が覚めん暗がりの世になりてをるぞよ。これでは、世は立ちては行かんから、神が表に現れて、三千世界の天之岩戸開きを致すぞよ』

これが、出口なお開祖に神懸かりされた艮の金神の宣言です。

この書は開祖ご昇天の大正七年までの二十七年間に、半紙に約二十万枚にわたって書かれました。これが、大本の根本教典となる「お筆先」です。

神界、幽界、現界の三界を、われよし強いもの勝ちの世界から立替え立直しをして、地上天国「みろくの世」を建設することが一貫して示されています。

また、みろくの世への道のりには、大変な大峠があるとも示されています。その大峠を〝大難を小難に小難を無難に〟と祈り続けることが、神懸かりしてからのなおの生涯でした。

平仮名と一部漢数字で示されたこの「お筆先」を、のちに王仁三郎が漢字を当てて編集したものが『大本神諭』として教典になっています。

神代の因縁

『天のご先祖さまは、天地いまだわかれず、陰陽未剖の太初にあたりて、大地球の先祖として、国常立尊を任じたまい、大地の修理固成を言よさしたまいました。国常立尊は、地上の主権をおび、くらげなすただよえる国土を修理固成されました。この神様を、国祖国常立尊と申し上げます』

（太古の神の因縁）

神代の時代に地上界の主宰神であった国祖の大神「国常立尊」こそ、なおに神懸かりされた艮の金神であります。

『太初の世界は、風清く澄み、水きよく、空青く、日月くもりなく、星は満天にうるはしく輝き、山青く……五風十雨の順序正しく、あたかも黄金時代、天国楽園の天地なりき。しかるに体主霊従的邪念は、凝って悪蛇となり、また悪鬼悪狐となり、その霊魂地上に横行闊歩してここに、妖邪の気満ち、貧富の懸隔を生じ、強者は弱者をしひたげ、生存競争激烈となり、地上はついに修羅の巷と化したるのみならず、神人多くその邪気に感染して利己主義をもっぱらとし、遂には、至仁至愛の大神の神政を壊滅せむとするにいたりける』

（『霊界物語』第十巻）

国祖の大神が治めていた時代は、素晴しい世界が続いていましたが、次第に妖邪の気が満ちてきます。

その気を感じた国祖の大神は、神政を維持しようと「天地の律法」を制定します。

『内面的律法（五戒律）

省みよ。恥じよ。悔い改めよ。天地を畏れよ。正しく覚れよ。

外面的律法（三大綱領）

第一に、夫婦の道を厳守し、一夫一婦たるべきこと。

第二に、神を敬い、長上を尊み、博く万物を愛すること。

第三に、互いに嫉妬み、誹り、偽り、盗み、殺しなどの悪行を厳禁すること』

この律法を守り、より良い世の中にしていこうとされました。

ところが、国祖の大神の治世は非常に厳格で、われよし強いもの勝ちの気風を持つ他の神々が、次々と不平不満を訴えるようになったのです。さらには天の大神も巻き込み、国祖の大神の退隠を迫ります。

天の大神は説得を試みますが、国祖の大神は「自分がいなくなれば世の中は乱れ、元の泥海になってしまう」と断ります。天の大神もそのことをよく理解していましたが、「まことに申し訳ないが、今はあの神々の言うように退隠せざるをえない。しかし、必ず国祖に再現してもらわなければならない時代がくる、その時には自分も一緒に活動するから」と約束を交わしたのです。

やむなく国祖の大神は自らご退隠され、影から守護される身となりました。その際に艮（東北）に身をお隠しになったため〝艮の金神〟と呼ばれるようになったのです。

国祖の大神がご退隠されたあとの世の中は、われよし強いもの勝ちの悪神がはびこる世界になっていきました。次第に荒れ果てていくように、天の大神は〝このままでは世界は滅亡の危機に瀕してしまう〟ことを悟られ、三千年の間影から守護されていた国祖の大神に再現を命じられました。

そして明治二十五年の節分の夜、出口なおの肉体に帰神し、ご再現されたのです。

『大本における節分大祭は、この世の親神さまであり地上の神界の主宰神であられました、国祖大神さまのご隠退によって、終末の事態に立ちいたった人類世界の立替え立直しのため再び地上神界の主宰神としてご復権になられましたことを祝い、寿ぎまつるみ祭りでございます』

とは開祖の孫である三代教主出口直日の言葉ですが、毎年二月三日、綾部市にある聖地・梅松苑にある長生殿で執り行われる大本の節分大祭は、国祖の大神がご再現になったことをお祝いする大御祭であり、とても重要な意義があるのです。

お筆先の神髄

三代教主は、お筆先についてこのように述べています。

『大本のお筆先は、他の宗教の教えのように、文体に学問的な臭いがあるとか、韻文で飾られてあるとかいうものではありません。開祖さまがご日常、お暮らしの上でおつかいになっていた言葉のままでお諭しになったものであります。それは、生きた、開祖さまのお血を通わせてくださる、そのままに尊いお言葉が示してくださっているものであります』　（「私の手帖」第三集）

お筆先には、非常に大きな三千世界（神界、幽界、現界）の立替え立直しから、お水の一滴、野菜の赤葉一枚から大事にせよという日常的な教えまで含まれています。

お筆先は単なる宗教の教典でなく、神さまの約束を書き残されたものであり、法則を定められたものであるのです。

その後、明治三十二年に開祖と上田喜三郎、後の王仁三郎との出会いがあって、大本の神業が飛躍的に発展していくわけです。

神も人も勇んで暮らす世の中に

真の立替え立直しは〝心〟を変えることにあります。

まずは神さまの実在を認識し、もう一度、神も人民も勇んで暮らす世の中にすることです。そのためには、因縁のある身魂を引き寄せて、それぞれの身魂が、神さまのことを理解し、良い世の中を作るんだとお筆先には一貫して示されています。

私は、人間にも三種類あると思います。

それは、国祖の大神さまと同じ霊系の人で、国祖の大神さまと一緒に落とされて苦労を重ねながらも、世の中を良くしようとされる霊系の方たち。それから、われよし強いもの勝ちで来たけれども、このままではいけない、改心して良い世の中を作らなければならないと考える霊系の人たち。そしてもう一つは、あくまでも、われよし強いものがちが一番だ、と邪魔する霊系の人たち…。

皆さま方は、苦労しながらも良い世の中を作ろうと思っておられる方々です。〝何か良い世の中をつくらなければいけない〟〝このままではいけない〟と魂の奥底では誰もがそう思っている方々です。

本当に良い世の中を作るためには、自分だけが幸せではいけません。すべての人々の幸せをお祈りさせていただきながら、日々の生活を送ることが大切です。

教本3級認定講習会

「教本三級認定講習会」は、二月二十三・二十四の両日に開催され、のべ二十五人が参加した。

講師は浅田秋彦東京宣教センター長はじめ職員八人が担当。「実践リーダー教本『初級編』」をテキストに、第一章「大本とは」から第九章「聖地の祭り」までを全員で音読学習したほか、各章ごとに練習問題と信徒・未信徒役に分かれての対話実習を実施。

最後に筆記問題と対話実習形式の〝理解度チェック〟に挑んだ。

参加者からは「大本信徒としての使命の大切さを痛感しました。理解しているつもりでも、改めて教えていただき大変勉強になりました（六十歳代・女性）」「充実した内容に驚きました。これだけは最低知っておかなければならない教義がわかりやすくまとめられていて、これをしっかりマスターすれば宣教に大いに役立つと思います（六十歳代・女性）」などの感想が寄せられた。

各章ごとにテキストを音読したあと講師が細かく解説を行った

関東教区祭務部長研修会

「関東教区各機関祭務部長研修会」は、二月二十四日午前十時三十分から午後三時まで開催され、七機関の祭務部長が参加した。

今回は今年度教団方針にも掲げられている〝祭祀宣教〟について研鑽。各機関共通の課題となっている〝次世代の祭式リーダーの養成〟〝奉斎世帯における月次祭執行〟の二点が取り上げられ、それぞれの実情や特徴などを踏まえ、今後大いに取り組んでいくことを確認した。

各部長からは「まつりは信仰の原点なので、各機関での祭式講習会の開催に改めて取組みたい」などの声が聞かれた。

東光苑月次祭・春季合同慰霊祭

東光苑月次祭・交通安全祈願祭・春季合同慰霊祭は三月十日、午前十時三十分から、斎主・森良秀東京宣教センター次長のもと執行され、三百九十人が参拝した。

祭員は関東教区東京主会、伶人は宮咩会関東支部、少年少女祭員は涌井大嗣郎くん・三四郎くん兄弟、土方清美さん、榎戸真弥さん、大本神諭拝読は林崎隆之福島主会長、添釜は高野社中が担当した。

祭典後、浅田秋彦東京宣教センター長があいさつに立ち、東日本大震災発生日を翌日に控え、改めて犠牲者への哀悼の意と、今なお避難所生活を送られる被災者に対しお見舞いを申し上げるとともに、天然力、自然力を用いた安心・安全なエネルギー開発への転換を訴えたほか、日本人一人ひとりの心と生活の在り方を省みること、日・水・土・空気の恩恵に感謝することを説いた。

また三月十九日から二十二日まで開催される「出口王仁三郎とその一門の作品展（鎌倉展）」への参観や四月から開催予定の「東光苑エスペラント講座」などについても紹介した。

続いて、茨城主会天国の城分所のみなさんが「暁の大地」の朗読を奉納した。

天国の城分所の月次祭でも定期的に奉納されている「暁の大地」の朗読

出口なお・出口王仁三郎の世界を語る

第百二十一回大本公開講座『出口なお・王仁三郎の世界を語る２０１３』は、三月二十日午後二時から三時三十分まで、港区新橋の航空会館において、浅田秋彦東京宣教センター長を講師に「一つの神、一つの世界、一つの言葉―みろくの世への道筋―」と題して開催された。参加者は十人（内、一般六人）。

講座では、開教以来示されているみろくの世建設、世界の恒久平和実現に向けての主活動である宗際化活動・世界連邦運動、エスペラントの普及活動について解説。「日本は文芸、宗教、教育などあらゆる分野において、世界の中枢府にならなければならない」と結んだ。

参加者からは「世界は末まで疲れきり、行くところまでいって、どうにもならなくなったとき、世界平和が開かれるのだと思います。それまでの現代をどのように生きるか、考えさせられました（三十四歳・男性・一般）」などの声が聞かれた。

東光苑祭典・行事予定

4月

7日（日）午前10時30分～午後3時
東光苑観桜茶会

14日（日）午前10時30分執行
東光苑春季大祭（教主さまご臨席）

17日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・王仁三郎の世界を語る2013」
講題 ネットワーク時代を生きるための患者学
講師 加藤眞三（慶應義塾大学看護医療学部教授）
会場 航空会館（港区新橋1―18―1）

21日（日） 午後2時30分執行
企業繁栄祈願祭（31回）

29日（日） 午前10時30分執行
四代教主毎年祭（12年）

5月

4日（土）午前10時30分執行
教主生誕祭・三代教主（111年）教主補（116年）聖誕祭

5日（日）午前10時30分執行
みろく大祭遥拝祭

12日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

15日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・王仁三郎の世界を語る2013」
講題 出口王仁三郎の預言～みろくの世の姿～
講師 森 良秀（東京宣教センター次長）